

コレゴヌス種苗生産試験

團 昭紀・尾田 文治

目 的

山間部における養殖用新魚種または放流対象魚種として有望であると考えられるコレゴヌス・ペレッドの種苗生産技術を確立する。

材料と方法

平成元年 2 月に長野県水産試験場佐久支場から発眼卵として導入し、小歩危淡水養魚場で種苗生産したコレゴヌス・ペレッドを親魚として養成した。

飼育池は 78m²角型池（水深 1.0m）1 面を使い親魚養成を行った。

飼育水の旬別水温変化を図 1 に示した。小歩危淡水養魚場では水温変化の異なる 2 系統の水を使って飼育しており、11 月上旬までは混合水を、それ以降は水温降下の早い系統の水だけで飼育した。

飼料については、市販アマゴ用配合飼料を与え、産卵期間中でも給餌を行った。

熟度鑑別は、12 月上旬より開始した。採卵は搾出した卵の流動状態、色調等を見て良好と思われる卵について乾導法にて受精させた。また、水性菌付着防止のため、ふ化器に収容後、当日中にマラカイトグリーンで薬浴処理を行った。使用したふ化器はビン式ふ化器を模したロート（直径 30cm）を使用し、ロートの下部より通水した。

発眼後イソジン 50ppm で 30 分間薬浴した。ふ化器は稚魚飼育水槽中にセットし、ふ出した仔魚は直接飼育水槽中に流れ出ていくよう配慮した。

仔稚魚の飼育は、ふ化器を取り上げた稚魚飼育水槽（0.9×1.2×0.4m）2 面で行った。餌料は冷凍シオミズツボウムシをふ化直後から 30 日まで、配合飼料をふ化直後から与えた。

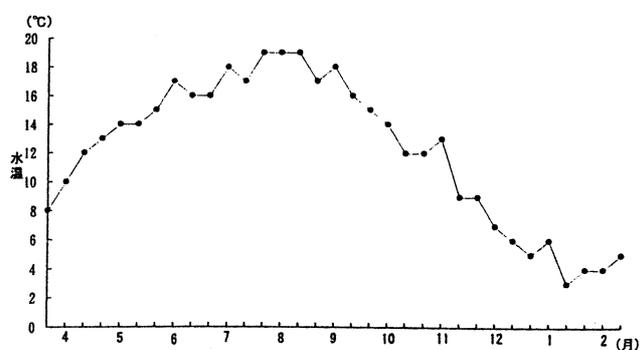


図 1 平成 5 年度親魚飼育水の旬別水温変化

結果と考察

平成5年12月上旬から6年1月上旬にかけて、雌魚30尾から752,000粒採卵し、それから55,000粒の発眼卵を得た。このうち、まとまった発眼卵が得られたのは12月15日、20日に3尾から採卵した場合のみであり、残りはふ化器に収容後、数日で、卵が白濁したため死卵と判断し廃棄した。

図3に採卵尾数と水温の関係を示した。これによると、水温が8~7に下降するあたりで採卵が始まっており、前年と同様の傾向がみられた。

図2は雌魚の魚体重と卵重の関係を示した。これによると、大型魚ほど卵数が多い傾向がみられた。

発眼卵のふ化は平成6年2月上旬から開始された。飼育水は年間温度差の少ない系統の水を使った。餌料は、ふ化直後から配合飼料（協和初期飼料）を与え、補完的に冷凍ワムシを与えた、配合への餌付きは良好であった。

図2 平成5年度雌魚の魚体重と卵重

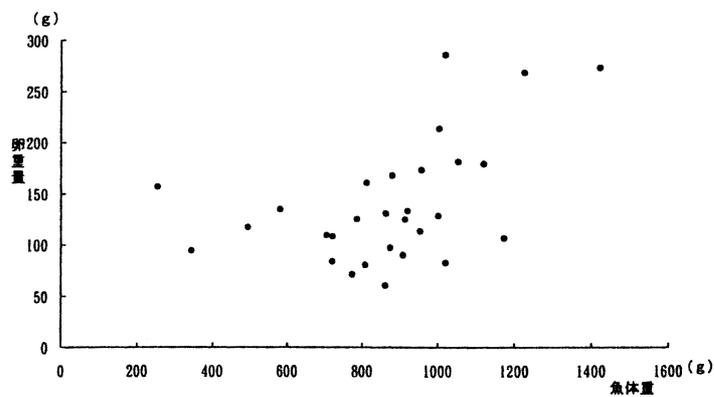


図3 平成5年度採卵尾数と水温の関係

